

広陵町埋蔵文化財調査概報 4

ふるさと街道整備事業地内

第1次発掘調査概報

1993

広陵町教育委員会

例 言

1. 本書は、奈良県北葛城郡広陵町大字三吉地内に予定された「ふるさと街道整備事業」の第1次試掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、広陵町の委託を受け、広陵町教育委員会が実施した。現地調査は平成3年4月30日に開始し、6月28日に終了した。実働日数は36日間である。事業対象面積は33,600㎡、試掘調査面積は1,108㎡である。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 広陵町教育委員会 教育長 上村恭三
調査指導 奈良県教育委員会
調査担当者 広陵町教育委員会 社会教育課 技師 井上義光
調査補助員 前嶋祥江、蒲生玲子、高井美智子、多田慶子、藤村孝子
調査作業員 松井正一、藤井清治、北橋 昇、青木勝義、藤井朝芳
調査事務局 広陵町教育委員会 社会教育課 課長 森川 勇、主事 山下善敏
4. 本書をまとめるにあたり、下記の機関並びに諸氏に種々の御協力を得た。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会文化財保存課 主幹 泉森 皎
(現奈良県立橿原考古学研究所研究部長)、
香芝市教育委員会 田中史夫 (現枚方市教育委員会)、
広陵古文化会 会長 坂野平一郎
5. 本書に使用した周辺遺跡図及び周辺地形図は昭和60年に広陵町が発行した1万分の1、2,500分の1の地図に加筆したものである。
6. 本書の執筆・編集は井上が行った。

目 次

I. 契機と経過	1
II. 位置と環境	1
III. 調査の概要	3
1. 各トレンチの調査	3
2. 遺物	9
IV. 結 語	12

I. 契機と経過

広陵町大字三吉元赤部方、元斉音寺方において広陵町は「ふるさと街道整備事業（ふれあい公園）」として5.7haの公園造成を計画した。事業対象範囲が広大であるため、奈良県教育委員会より通達されている「開発事業にともなう埋蔵文化財の取扱い」に則り、開発面積が10,000㎡をこえる大規模開発事業であるため、現地踏査を行った結果、試掘調査が必要であると判断した。広陵町は、平成3年度に、事業対象地の谷地形部を「ふるさと特別対策事業区域造成工事」（3.36ha）、平成4年度は丘陵部を「ふれあい公園都市公園事業」（2.34ha）として事業計画を予定していた。このため奈良県教育委員会、広陵町事業部、広陵町教育委員会が協議した結果、事業対象地を2ヶ年に分けて試掘調査することとなった。平成3年度は、谷地形の中央部にトレンチを設定し、遺構の有無を確認することにした。

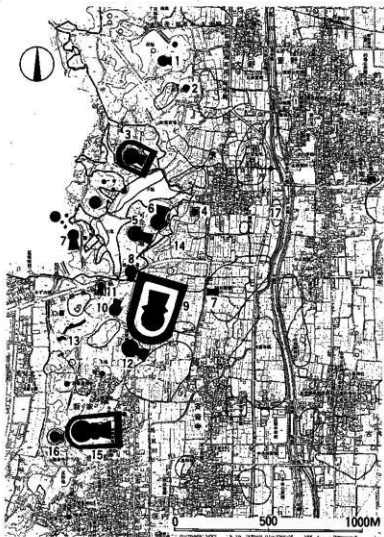
現地調査は広陵町教育委員会が担当し、平成3年4月30日に開始、同年6月28日に終了した。実働日数は36日間を要した。

II. 位置と環境

平成3年度事業である「ふるさと特別対策事業」の区域（以下対象地と称する。）は、馬見丘陵内部、巢山古墳(9)の西方約200mに位置する。調査地点は、佐味田川の沖積作用によって形成された小谷である。現況は、水田であり、等高線に沿うように畦畔が走るが、20年以上も作付がなされず荒れ果てた状態で芒、葦が身丈以上に繁茂していた。谷の上部では水が溜り水草が生い茂っていた。

対象地を包摂する馬見丘陵は南北7km、東西3kmに広がる低位丘陵で、西は葛下川、東は高田川で限られ、北限は両河川が注ぐ大和川となる。丘陵内部を流れる佐味田川、澗川が丘陵を三分し、南北走向の主幹尾根を形成する。主幹尾根とそこから派生する小尾根と小谷で形成された丘陵の尾根部には雑木が茂り、谷部には小規模な水田とその谷奥部には溜池が形成されている。特に対象地は、この丘陵の旧状を留めていた。丘陵南部には広陵町から香芝市にかけての広範囲に真美ヶ丘ニュータウンが造成され、北部も西大和ニュータウンがあり、丘陵の旧状を留める地帯は少なくなりつつある。

対象地は馬見古墳群と総称される丘陵東部に築かれた古墳群のうちで、中央部の一群としてグルーピングされる大型前方後円墳の密集地帯に近接する。ここでは対象地周辺の遺跡を概観し、詳細は他の報告書に譲る。^(B1) 対象地の東200mには巢山古墳(9)、南400mには新木山古墳(15)等の全長200mを越す前方後円墳が築かれ、周辺には倉塚古墳(5) 倉塚北古墳(6) ナガレ山古墳(7)^(B2) 等100mを越す前方後円墳が続き、帆立貝式古墳のなかで最大規模を計る乙女山古墳(3)^(B3)をはじめ池上古墳(1)^(B4)、佐味田狐塚古墳(8)^(B5)、三吉2号墳(10)、三吉石塚古墳(16)^(B6)等の帆立貝式



- | | | |
|--------------|------------|------------------------|
| 1. 池上古墳 | 7. ナガレ山古墳 | 13. ふるさと街道整備事業に伴う試掘調査地 |
| 2. 坊主山古墳 | 8. 佐味田塚古墳 | 14. 寺戸遺跡 |
| 3. 乙女山古墳 | 9. 栗山古墳 | 15. 新木山古墳 |
| 4. 寺戸方墳(文代山) | 10. 三吉第2号墳 | 16. 三吉石塚古墳 |
| 5. 倉塚古墳 | 11. タダオシ古墳 | 17. 寺戸東遺跡 |
| 6. 倉塚北古墳 | 12. 羅岐神社古墳 | |

図1 調査地周辺遺跡

古墳が築かれている。これら古墳群の築造時期は概ね4世紀末から5世紀後半と考えられているが、本格的な発掘調査が行われた古墳は数少ない。この他に中小規模の円墳、方墳、前方後円墳等も築かれているがその実態は明らかにされていない。

墳墓以外の生活遺跡は、栗山古墳(9)の北東部に広がる寺戸遺跡(14)^(註7)、寺戸東遺跡(17)^(註8)が調査されており、古墳時代後期から平安時代の住居跡が確認されているが、前述の大型前方後円墳

を築いた集団の集落跡と考えられる遺跡は確認できていない。

註1) 白石太一郎、前園実知雄「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物報告書第29冊』奈良県教育委員会 1974年

河上邦彦、松永博明、卜部行弘「史跡牧野古墳」広陵町文化財調査報告書第一冊 1986年

註2) 河合町教育委員会「史跡ナグレ山古墳現地説明会資料」1989年

註3) 河上邦彦、木下 亘「史跡乙女山古墳」河合町文化財調査報告第2集 1988年

註4) 奈良県立橿原考古学研究所「池上古墳発掘調査概要」1991年

註5) 泉森 皎「佐味田孤塚古墳」奈良県教育委員会 1976年

註6) 井上義光「石塚古墳」広陵町埋蔵文化財調査概報1 広陵町教育委員会 1988年

註7) 河上邦彦、泉 武「寺戸遺跡発掘調査概報」広陵町教育委員会 1975年

註8) 松本洋明「寺戸東遺跡発掘調査概報」奈良県立橿原考古学研究所 1986年

III. 調査の概要

調査対象地は、南北走する主幹尾根とそこから西南西へ派生する小支丘によって挟まれた谷地形で、谷奥から佐味田川へは北東から南西方向へ延び、川の左岸に開く形となる。

遺構、遺物の有無を確認するため、谷地形の中心(谷底)を調査するためトレンチを2本設定した。もう一本は谷の南側に所在する小支丘に設定し、第3トレンチとした。

第1トレンチ(図3)

南北走向の主幹尾根と、主幹部から西南西方向に派生する小支丘に形成される谷は、北東部谷奥から蛇行しながら南西進する。谷の規模は、幅約60m、長さ350m程である。谷奥には、かつて直下の水田全てを陥つたと考えられる溜池が残る。

第1トレンチは、谷の中心部、谷底を目指して設定したため3ヶ所で屈折した。幅4mで長さは150mに及ぶ。上層堆積状況はトレンチ南壁で観察し、5m間隔で記録した。

基本的層位は谷奥部Sec1～5と谷中部Sec7～11、谷開口部Sec12～15で異なる。

谷奥部では耕作土(2層)の下に床土面が二面(3-1、-2層)があり、その下に整地土層が2面存在する。上層整地土は黄灰色土系の堆積土で(4、7、9層)、下層整地土は茶褐色系(19、22、23、24層)が存在する。さらにSec1～Sec3には、この上下2層の整地層を分ける間層が観察できる。下層整地土には川越編年のI段階D型式にあたる11世紀末～12世紀初頭の瓦器片が含まれる。さらに下の地山直上には層厚5～10cmの暗灰色系の還元粘質土(29、30、31、35層)があり一次滞水状態となっていたことが分かる。

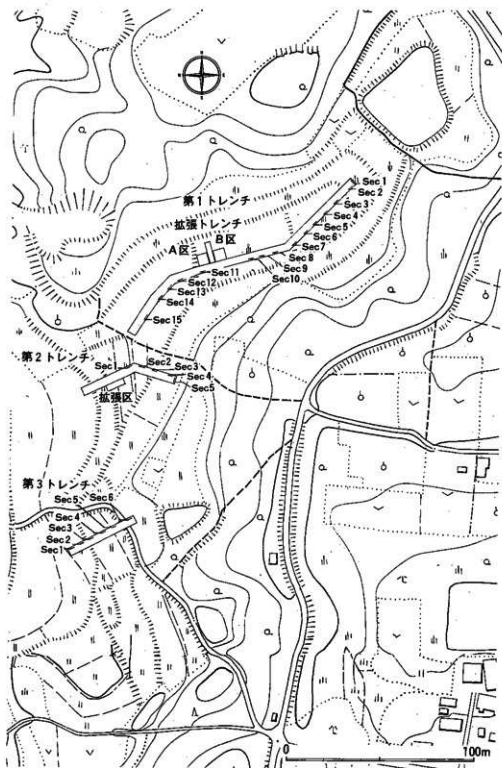
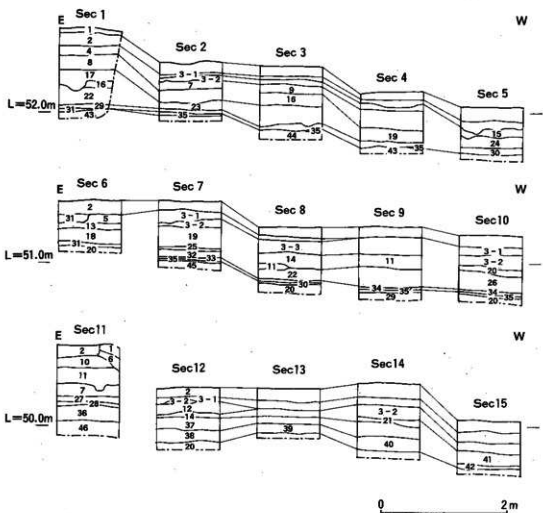


図2 調査トレンチ設定図



- | | | |
|-------------------|---------------|-------------|
| 1. 表土 | 15. 明黄褐色砂質土 | 31. 暗灰色砂質土 |
| 2. 耕作土 | 16. 黄褐色土 | 32. 暗茶褐色粘質土 |
| 3-1. 床土 1 | 17. 淡灰褐色砂質粘質土 | 33. 暗灰色粘質土 |
| 3-2. 床土 2 | 18. 淡黄褐色土 | 34. 灰色粘土 |
| 3-3. 床土 2 (明黄褐色土) | 19. 茶褐色粘質土 | 35. 灰白色砂 |
| 4. 黄褐色土 | 20. 明黄褐色土 | 35'. 灰白色砂質土 |
| 5. 淡黄灰色土 | 21. 暗茶色粘質土 | 36. 黄褐色粗砂 |
| 6. 暗茶色壤粘土 | 22. 茶灰色砂質土 | 37. 灰茶色粗砂質土 |
| 7. 淡黄灰色砂質土 | 23. 茶灰色粘質土 | 38. 明灰色粗砂 |
| 8. 淡黄灰色砂質粘質土 | 24. 茶褐色砂質粘質土 | 39. 灰色砂 |
| 9. 灰褐色砂質土 | 25. 暗茶灰色砂質粘質土 | 40. 暗灰色粗砂質土 |
| 10. 黄褐色土 | 26. 茶灰色 | 41. 灰褐色粗砂 |
| 11. 灰色砂質土 | 27. 黄灰色砂質土 | 42. 暗灰色粗砂 |
| 12. 灰黄色砂質土 | 28. 暗茶灰色粘質土 | 43. 明黄褐色粘質土 |
| 13. 黄灰色土 | 29. 暗灰色粘土 | 44. 明黄褐色粘土 |
| 14. 淡灰色砂質土 | 30. 暗灰色砂質粘質土 | 45. 黄褐色粘質土 |
| | | 46. 明黄灰色粘質土 |

図3 第1トレンチ南壁抽出土層断面図

谷中央部は基本的層位は谷奥部と変わることなく、耕作土（2層）床土（3-1、-2層）が比較的厚い。整地土は上層（13、14、20層）より下層（18、22、26層）が厚く、密に堆積する。地山直上にも暗灰色系の還元粘質土が観察できる。

谷開口部では、谷奥部、中央部で観察された整地層及び暗灰色系の還元粘質土がなくなり、地山直上に粗砂質土（36～41層）が厚く堆積する。

拡張区（図4）

トレンチ中央部で土師器甕を埋納した土坑を検出したため、北側に幅3m、長さ11mで拡張トレンチを設定し遺構の広がりを確認するため、さらに拡張区A（5.5×6m）と拡張区B（6×6m）を設定した。

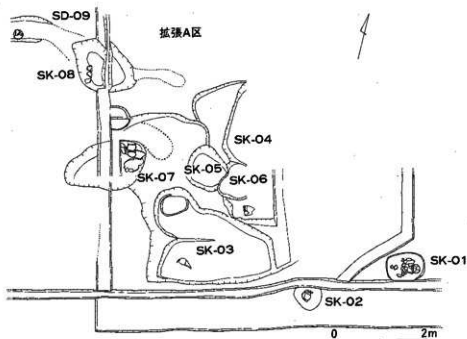


図4 第1トレンチ拡張区A土坑群実測図

主に平安時代の土坑と溝で遺構規模と遺物は以下のとおりである。

- SK-01 楕円形土坑（長径83cm、短径62cm、深23cm）土師器甕2
- SK-02 不整形円形土坑（長径59cm、短径52cm、深16cm）土師器甕1
- SK-03 不整形土坑（256cm×157cm、深92cm）土師器甕
- SK-04 不整形土坑（150cm以上、100cm以上、深さ65cm）
- SK-05 隅丸方形土坑（長辺82cm、短辺79cm、深さ62cm）
- SK-06 不整形土坑（78cm×60cm以上、深さ47cm）

SK-07 楕円形土坑（長径180cm、短径105cm、深55cm）土師器甕

SK-08 不整形土坑（長径158cm、短径105cm、深50cm）

SD-09 幅40cm、深さ10~20cm、土師器杯、須恵器

第2トレンチ（図5）

谷の開口部に幅4m、長さ55mで設定した。ここでも谷底を検出するよう努めた。トレンチの下方で土坑群を検出したため、トレンチ南へ幅3m、長さ10mで拡張した。

トレンチの各層で土層抽出図を作成した。Sec5は、最上部で耕作土層（2層）、床土（3層）、攪乱土（8層）を経て地山に達する。Sec4もほぼ同様な堆積が観察される。Sec3は耕作土以下に整地土が認められる。（6、9、11層）Sec2・1も整地土（4、5層）が観察される。

第2トレンチでは、西端部で弥生時代後期～平安時代の土器包含層と平安時代の土坑群を検出した。

第3トレンチ（図5）

第3トレンチは、主幹尾根部から西に派生する小支丘上に幅4m、長さ39mで設定した。

トレンチ上部Sec6からSec2まで基本的な層位は変化がなく、耕作土、床土以下は一部整地土層（4、5、6層）が存在し、直下は地山である。Sec1は耕作土以下の床土が厚く堆積し、直下には青灰色細砂層が堆積していた。

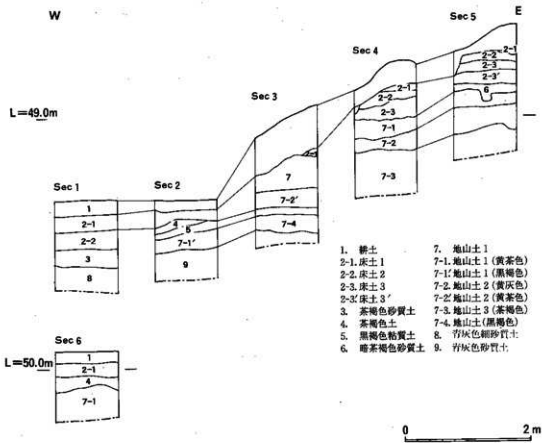
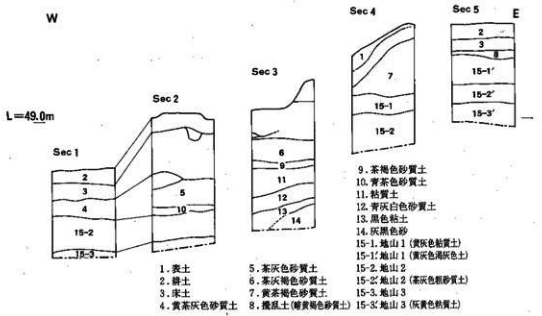


図5 第2・3トレンチ北壁抽出土層断面図

2. 遺物(図6、7)

図6に図示した1～6の土師器は第2トレンチ包含層から出土した遺物である。1は口径15.3cm、器高4cmを計る。口縁端部は丸く納める。3も同形式の杯で口径15cm、器高4.2cmを計る。2はやや大型で口径17.2cmで端部に面を持つ。4は口径16cmの皿で外面をヘラケズリする。5も皿で口径19.4cmを計測する。6は把手のつく甕で口径18.2cm、外面ハケで仕上げる。7は第1トレンチSK-01から出土した口径16cm、器高16.1cmを計る少型の甕で外面は粗いタテハケで仕上げ、内面には指頭圧痕が残る。8も第1トレンチSK-01から出土した甕で口径14.6cm、器高16.5cmを計る小型の甕である。9はSK-02出土の甕、口径17.6cmで肩の張る形状をする。10は第1トレンチ中央部出土の瓦器で口径15.2cm、器高5.8cmで見込み部の暗文は粗いジグザグ文である。器高指数は38で白石編年Ⅰ段階第3型式からⅡ段階第2型式、川越編年のⅠ段階D型式にあたり、11世紀末～12世紀初頭と考えられる。11は第2トレンチ土坑出土資料で口径15.4cm、器高6.5cmを計る。器高指数は42、調整は10と大差なくほぼ同時期と考えて大構ない。

図7は第1トレンチ拡張区Aで検出した土坑出土の土師器甕である。1はSK-04出土の甕で口径24.4cm、体部はタテハケで調整し、口縁端部には面を持つ。2もSK-04出土の甕で口径25.2cm、口縁部は頸部から大きく外反させる。3はSK-07出土の長胴甕で、口径22.6cm、器高36.3cmを計る。口縁端部外面に面を持ち、体部外面はタテハケ、内面上部はヨコハケと指頭で仕上げる。4はSK-01出土の長胴甕で口径27cm、器高34.5cmを計る。体部外面はタテハケで仕上げ、内面には指頭圧痕が残る。6はSK-06出土の長胴甕で体部外面にタテハケ、内面には指頭圧痕が残っていた。

(註) 白石太郎「『瓦器』の生産に関する二、三の覚え書」『古代文化』27巻3号 1975年
川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』
奈良国立文化財研究所 1983年

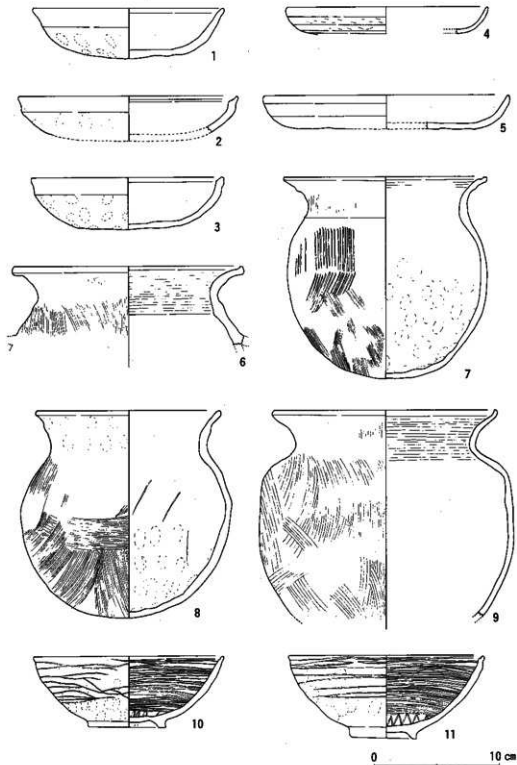


図6 第1・2トレンチ出土土器実測図

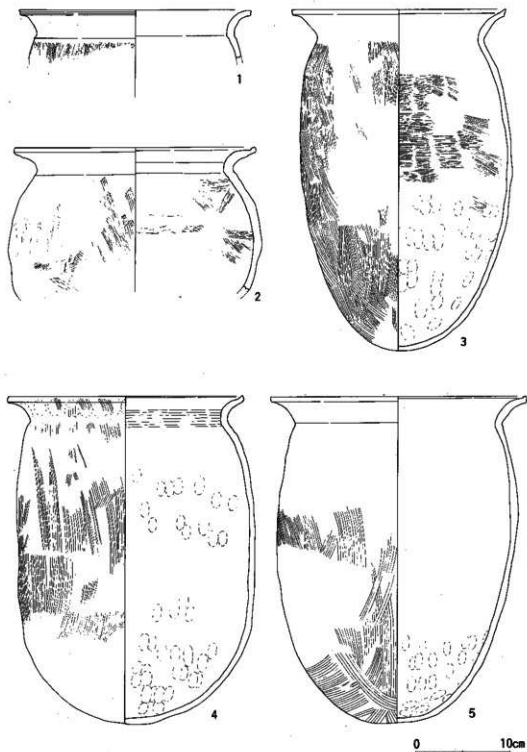


図7 第1トレンチ出土土器実測図

IV. 結 語

5.7haに及ぶ拡大な事業対象地内で遺構、遺物の有無を確認するため行った試掘調査によって狭少な谷での土地利用等が僅かながら解明することができた。以下、箇条書きにして結語に換えたい。

1. 馬見丘陵の主幹尾根部とそこから派生した小支丘によって形成された谷の土地利用の端緒は、第2トレンチ西端で検出した包含層出土の弥生時代後期の礎底に求められる。該期の遺構は未検出であるが、谷の開口部で生産活動が行われた可能性がある。その後の古墳時代の遺構、遺物は検出できない。

本格的に耕作地として土地が利用されるのは、平安時代以降である。第1トレンチの谷奥部から中央部で観察される整地土層には11世紀後半から12世紀代の瓦器が含まれ、この時期に大規模な耕地造成が行われたことが判る。逆にこれら整地土層の下に堆積する暗灰色系の粘質土から、該期に至るまで自然の谷地形を呈していたと考えられる。

2. 馬見丘陵内部を北流する佐味田川・滝川流域に真野条・墓門条が設置されたことは知られているが、その位置は確定していない。木村芳一氏の復元条里に依れば、調査地点は真野条五里十七～三十二坪にあたり、延久二年（1070年）の興福寺大和国雑役免坪付帳に記される片岡庄の一部に含まれる。坪付帳から11世紀後半には荘園化していたことが判る。^(註) この谷で確認した大規模な耕地造成が荘園開発を契機とした蓋然性は高いものと考えられる。
3. 第1トレンチ拡張区で検出した土坑群は周囲に住居跡等の生活遺構もなく、出土状況から土器棺等に転用する埋葬施設とも考え難い。類例を持って再検討したい。

(註) 木村芳一「真野・墓門の条理について」『奈良県史』第4巻奈良県 1987年

図

版



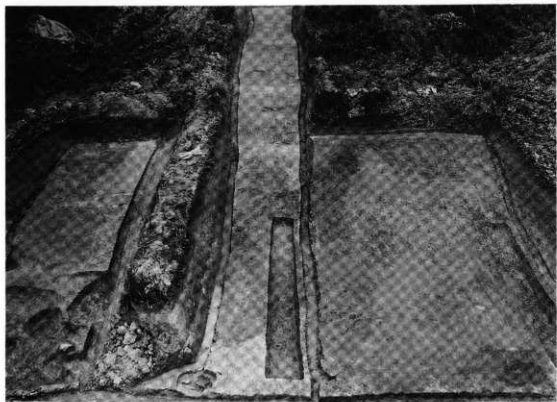
航空写真（北上空から）



航空写真



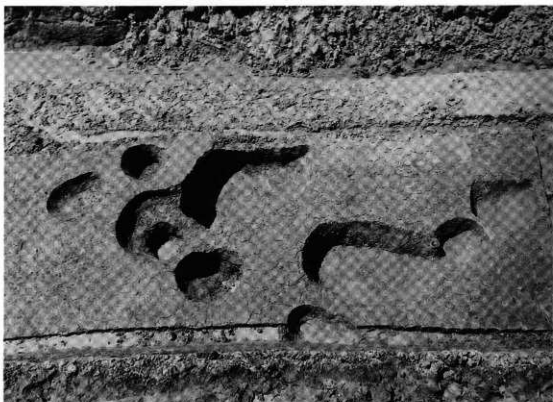
第1トレンチ拡張区全景（北から）



第1トレンチ拡張区全景（南から）



第1トレンチ拡張区土坑群（南から）



第2トレンチ拡張区（南から）

広陵町埋蔵文化財調査概報 4

ふるさと街道整備事業地内
第1次発掘調査概報

発行日 平成5年3月31日

発行 広陵町教育委員会

印刷 橋本印刷株式会社